



猫ねこの忠たう信のぶ

笑福亭 松 鶴
桂 米之助 繪

上方の名物は淨瑠璃で、此の淨瑠璃と申しましても、色々種類がござりますが、先づ淨瑠璃と云ふものは織田信長の愛妾小野お通、此の女おとが始めて淨瑠璃と云ふものを作をして後に岩船檢校が琵琶を以て合せたのが始りやそうでござります。また鶴翁と云ふ仁は曆と云ふ淨瑠璃を百段作らへたと云ひます。此京阪では淨瑠璃と云ふたら竹本義太夫節を淨瑠璃と云ひます。又東京では淨瑠璃と云へば清元或は常盤津ぢやとか一中節、河東節また大薩摩或は新内など何れも淨瑠璃ですが、其の内にも義太夫と來ますと天狗が多い、もう素人の連中が寄りますと皆自慢をしますので此の連中を天狗連と名を付けて居ります。

「オイ次良やんやないか」

「オ、六さん、今日は」

「お前何處へ行くのんや」

「お師匠はん處へ行くね」

「今度師匠とこに會が有るねとな」

「それで忙がしうて忙がしうてどもならんね」

「今度の會は通會みどか雜か」

「矢ツ張り通會たてやが何日も忠臣藏とか菅原とか彼處むこの連中の出し物は極つてると云ふ世間の評判やで今度は千本櫻の通會たてにして御殿は連中皆惣出で掛合や」

「ナニ千本か夫れは宜かろう。そこで出番はどうなつてるね」

「すし屋は吉野屋の常やんが語るね」

「フムすし屋は吉野屋の常貴が語つたら私わいは何處を語るね」

「六さんは椎の木の端場を語つて貰ふと云ふてはつたで」

「ナンヤ私に椎の木の端場を語れと、オイ私は昨日きのふや今日けふの稽古と違ふで、彼の稽古屋では私が連名頭や、それにナンで椎の木の端場を語らんならんね」